

文京学院大学 入学式

2015年4月2日 東京ドームシティホールにて

学長告示

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。これまで子女を暖かく支援してこられたご父母、ご家族ならびに関係の皆様のお喜びもさぞかしのことと存じます。

本日の入学式には大学院の経営学研究科、外国語学研究科、人間学研究科、保健医療科学研究科に入学された大学院生 53 名と、また大学の経営学部、外国語学部、人間学部、保健医療技術学部に入学者 1217 名のかたがたが参列しております。これだけ多くの平成 27 年度入学生のみなさんをここに迎えることは、私どもにとってこの上ない喜びであり、文京学院大学教職員を代表して心より歓迎したいと思います。

さて本学は、昨年秋に創立 90 周年をむかえましたが、今後 100 周年にむけてさらに魅力ある大学として発展してゆくべく努力を続けているところであります。本学の歴史を振り返りますと、今から 90 年前、関東大震災後の混乱の中で、当時の女子の自立を目指して創立者島田依史子先生が 22 歳で設立した「島田裁縫伝習所」が始まりになります。そのあと、本郷女学院を経て文京女学院と名を改め、医学技術者養成選科、短期大学を開設し、1991 年には女子大初の経営学部開設とともに文京女子大学が誕生しました。そしてその後も順次人間学部、外国語学部を開設し、2002 年にいまの名称である文京学院大学に改称されたわけでありまして。2005 年には男女共学となり、翌年、保健医療技術学部を開設して、4 研究科、4 学部 10 学科を擁する現在の大学にまで成長いたしました。この間に本学の建学の精神である「自立と共生」の薫陶を受けた多くの卒業生が社会に出て信頼され、国内外で活躍しています。

多くの大学では、大学の個性や特色を「建学の精神」、「大学教育の理念」といった形で標榜しておりますが、文京学院大学では創立当初より一貫して「自立と共生」を建学の精神としてかかげてきております。

ここで本学の教育の理念ともいえる建学の精神「自立と共生」について少しお話しさせていただきたいと思いますが、その前にまず、みなさんにとって「自立」とはなにか、「共生」とはなにかということについて、少しだけ考えてみていただきたいと思います。

おそらく皆さんが本学を選ばれて入学した理由がそれぞれであるように、自分にとっての「自立と共生」は何かという答えもそれぞれだと思います。「自立と共生」はそれだけ裾野の広い概念です。ですから時と場所をこえて常に新しい指針を与え続ける概念ともいえると思います。皆さんが入学されますと初年次に「人間共生論」という科目を必修で学ぶ

こととなります。そこでの講義を通して再び建学の精神について考える機会を持つことができる筈です。

建学の精神である「自立と共生」で述べられる「自立」とは、経済的、精神的に依存していた今までの対象からいったんみずからを切り離すことによって、自分の力と考えで行動できるように変わりゆくことを意味しています。したがって自立を達成することによって、精神的にも社会的にも独立した個人として生きてゆくことができるようになるのです。創立者の島田依史子先生は、そのためには、技能、技術、学識が必要であると説いておられます。本学では、この建学の精神に則って皆さんが社会的に自立するために必要な技能、技術、学識を確実に修得できるよう、全教職員が支援しますので、皆さんも是非それにこたえて努力していただくようお願いしたいと思います。

次に「共生」についてですが、一つのたとえとしてチーム医療のお話しをしようと思います。チーム医療のことを知っている人もいると思いますが、簡単に説明しますと、一人の患者さんを治療するのに多種の医療ケア専門職の人々が集まり医療チームを形成して、相互にコミュニケーションをとりつつ治療やケアを進めてゆくシステムです。チーム医療に携るメンバーは、病気の種類や患者さんの病状によってチームへの参加形態は様々ですが、医師、看護師、薬剤師、理学療法士、作業療法士、臨床検査技師、管理栄養士、言語聴覚士、医療ソーシャルワーカーなど多くの医療職があります。患者さんを治療し社会復帰させるという共通目標のもとに、チームのメンバーは各自の専門技術を駆使して医療に臨みますので治療上の見解の相違も生じます。その際に必要とされるのは互いに職種専門性を認め合いながらコミュニケーションを通してチーム全体としてよりよい医療を目指すという合意形成なのです。このことによって質の高い安全な医療が提供されるわけです。

実はこのチーム医療における合意形成の態度が「共生」の考え方に繋がります。すべての社会においても、さまざまな専門分野の人がチームとして協力しながら成り立っているのです。「共生」とは自己と異なる異質のものを排除してしまうのではなく、相互理解の上に立ち、同じ世界の中で共存共栄してゆく営みといえます。このような姿勢は、自己の見識をひろげ、自らを成長させるきっかけを与えてくれるとともに、いかなるとき、いかなる場所にあっても新たな課題を発掘し、より豊かな社会の実現にむけた行動へとつながりてくれるのです。

もっと広く言えば、「共生」とは互いに自立した人たちが国籍、人種、性別、年齢など様々な違いを認めあい、尊重し、共に生きることを意味することといえるのです。

本学の建学の精神である「自立と共生」は、校訓とされる「誠実」と「勤勉」の心構えを持って自立を促し、「誠実」と「仁愛」の精神によって共生を育てゆくことを意味しているのですが、同時に「共生」の中に「自立」の概念が内包されていることにも気付いてほしいとおもいます。グローバル化が急速に進みつつある世界の中で、グローバリズムがナショナリズムの概念を内包しつつ共存している事実を、「自立と共生」の生き方に対峙させてみることができます。そうしたとき、自分も世界の一員であるという生き方、すなわ

ち地球市民的な生き方が必然的に現れてくるのです。今後みなさんが文京学院大学を卒業し、国内外を問わず様々な場所で活躍するときにも、自らの立ち位置を自覚しながら、同時にこの「自立と共生」の精神から生まれた地球市民的センスを持ち続け大切に培ってほしいと願っています。

さて、皆さんのお手元には會津八一先生の「学規」が配られていることと思います。

元学長でありました島田和幸先生は、この学規を学生たちにしめされて、機会あるごとに学規に書かれた生き方を繰り返し説いてこられました。この学規に盛られた内容は本学の建学の精神とも軌を一にするところがあるのです。そこで會津八一先生のことと学規の内容について少し触れてみたいと思います。

會津八一先生は、明治14年に新潟市に生まれました。75歳で亡くなるまで、日本の歌人・美術史家・書家として活躍されたかたで、同時に優れた教育者でもありました。早稲田大学英文科を卒業後、29歳で坪内逍遙の招聘により早稲田中学校の英語教員となり後に、早稲田大学文学部教授として多くのお弟子さんを育成されました。

皆さんのお手元にある学規は、大正3年に作られたもので、4か条の人生訓を記したものであります。これは当時、彼の家に下宿していた受験生のために作られたものですが、後に彼の門下生に向けて語られた言葉ともなり、また八一自身の生活指針ともなった言葉でもあります。

この4か条の内容ですが、「ふかくこの生を愛すべし」とは、生命あるものへの畏敬の念と生きる者すべてに仁愛の心で接する事の大切さを説いており、共生の生き方につながっています。「かえりみて己を知るべし」とは、自分の過去を振り返ることで自分を知ることがを意味しており、過去への振り返りが自立への自覚を促すことに繋がってゆきます。「学芸をもって性を養うべし」とは、生まれ持った自分の素質や品性を磨くために学問・芸術を習得することの重要性を説いており、自立達成への手段を説いています。「日々新面目あるべし」とは、絶えざる自己研鑽と、自己革新の勧めであり、自立した自己を日々高めてゆく努力の必要性を説いているのです。

実は、最近になって、改めてこの学規の精神に込められた内容が、高等教育を受ける学生が身に付けるべき必要な態度として、国や企業からも要求されるようになってきているのです。

その意味において、皆さん一人ひとりが本学の建学の精神とこの学規を深く理解し、自己の人生の指針とされることを願っています。

最後に皆さんに期待したいのは、今後2年間あるいは4年間に、自らの自立に必要な技能や技術、学識を身につけるための学問を貪欲に積極的に吸収していただきたいということです。目的意識をもって主体的に学んだ学問は生涯の財産となりますが、受身の態度で

学業に臨むならそれは金銭と、時間の浪費に終わるはずでず。ですから積極的に問題意識をもち、旺盛な興味と関心をもってそれぞれの講義に臨んでいただきたいのです。無駄な講義は一つもありません。本学では皆さんが自立を目指して積極的に修得した技能、技術、学識内容が、ディプロマ・ポリシーすなわち学位授与方針に基づく基準に叶う内容であると判定した場合に初めて、学位を授与することにしております。

与えられた期限の中で学位や資格を取得できるよう、全学を挙げて在学中の皆さんを支援してゆきますので、皆さんもがんばってそれぞれがもつ目標を達成して欲しいと思います。

ここにいる皆さんが修業年限を終えて、そろって学位記を手にする日を願い学長の挨拶いたします。

平成 27 年 4 月 2 日

文京学院大学 学長
工藤 秀機